

魔法使いの呪縛

その恋を、笑いで誤魔
化して閉じ込めた

ギャグ悲恋（メリーバ
ッドエンド）

著者：白凧

魔法使いの呪縛

～その恋を、笑いで誤魔化し
て閉じ込めた～

ギャグ悲恋(メリーバッドエンド)

※目線が章を跨ぐと変わります。変わらない章もあります。

変わる場合は〇〇目線と書いてあります。

前半、中盤はわりとシリアスです。最後だけギャグ。

ギャグ悲恋なので、後味は悪いです。

目次

簡易キャラクター紹介

1章..ケガを負ってまで助けてくれる彼を、何故か嫌ってしまう私

2章.魔法使いの彼

3章.失礼な男との再会

4章.相変わらずの彼

5章.恋や愛はよどみの好物だから、俺は認めない！

6章.追いかけてらる？

7章.べ、別に好きじゃねえし！

8章.急に私に執着し始めた彼

9章.あー、はいはい、イケメンイケメン！

ネタバレキャラクター紹介

あとがき

簡易キャラクター紹介

小鳥遊ユイ(たかなし ゆい)

黒髪、茶色目の国宝級美人。霊媒体質で人の感情を増幅させる魔物であるよどみがつきやすい。何故かレオを嫌ってしまう。

光葉レオ(みつは れお)

ミントグリーンの髪、緑目のお調子者の口の悪い魔法使い。よどみと呼ばれる魔物を退治している。

あの人と出会ったのはいつだったか？
そうあれは、雨が降っていたある4月の夜の
事であった――

1章.ケガを負ってまで助けってくれる彼を、何故か嫌ってしまう私

小鳥遊視点

私は小鳥遊ユイ、友人からは明るくて性格がいいとよく言われている。

よく笑い、声を高くしていると、自然と人が集まってくる。

「ねえ、ユイ！ここの答えわかんないから教えて！」

「OK！どこどこ！あ、ここね！」

...私もわかんない！」

「聞いた意味ねえ！」

私は別に頭が良いわけでもなく、運動が特別できるわけでもなかったけど、頼られるのはやはり嬉しかった。

誰にでも好かれるのは流石に無理だけど、大多数には好かれる性格をしている。

私はそんな感じの子のはずだった.....。

.....

...

「おい、お前、何やってんだ？」

「え？」

最初の印象は明るい緑色の髪巨人。
髪の色を見て、独自の髪の色の人だ。二次
元キャラ？と思ったけど、声は完全に高校生
ぐらいの若者の声であった。

小鳥遊は学生のため周りにそんなに背が高
い男子はいなかった。
傘も差さずにぬれたままその場に佇んでいる
ので、風邪引くんじゃないか？と思って近付
いていく。

何故まだ学生である彼女が夜に1人での
かということ、春祭りというたまの夜の外出で、

急に小雨が降り始めて、天気予報を見ていたので傘を持っていた彼女が傘を差して視界が狭まった際に、皆とはぐれてしまったのである。

所々に街灯があるのだが、基本、狭くて暗い道を歩く。

人通りがないので、不安である。

そんな時に、声を掛けて来た190cmぐらいの学ラン姿の男を目の前にして、恐怖心を覚えるのは仕方がない事であった。

しかも、言葉遣いが悪い。

女子学生が恐怖を覚えるには十分だった。

なので、傘を差し出す前にピタリと歩みを止めた。

「そこのお前だよ。ちょっと遊んでやろうって言ってんだよ？」

「遊ぶ？」

変な男に絡まれたと顔を青ざめさせる。
しかも、街灯の灯りで密かに浮かぶ姿からすると、変な髪色をしている。

暗いし近付いても何処を見ているのか分からない。

そして、早く動かし、よく見えないし、彼の顔に興味もなかったので見ていない。

それよりも夜の中で特別目立つ明るい緑髪が嫌に目についた。

そして、その彼は、何かと戦い始めた。

全く見えないので、男が幻覚でも見てるんじゃないか？と思ったが、男の体が次々と傷を負うので、顔を青ざめさせる。

見ていられなくて、ギュッと目を瞑った。

何コレ？幻覚？夢でも見てるのかなあ。

夢なら早く覚めて！と目を瞑ってガタガタと震えるしかなく、バシャバシャという激しい水音と男の掛け声や風を切る音を聞く事しか出来なかった。

早く終われ早く終われ！ただそれだけを願ってどれぐらい経っただろうか？
男が膝を付いて、ゼエゼエと息を切らしているのを感じて目を開けていく。

「はあはあ、お前、一般人の、学生、だろ？こんな、夜中に、人気のない、ところ、うろついてんじゃ、ねえ、よ」

しかも、口が悪かった。

もうこの時点で恐怖心しか感じていなかったのだが、腰が抜けて立てなかった。

息を切らしながらも、差し出してくる手に血が付いているのを見て、ビクッ！とする。

その手を取らずにガタガタと震える足で物に捕まって立ち上がる。

すると、不機嫌そうな顔をされた。

こ、怖い！でも、その恐怖心をかなぐり捨てて、男の側に寄った。

丁度街灯に寄り掛かる形で座り込んでいたので、その顔は明かりの下でよく見えた。

近くで見てもみると、頭から血を流しながらフラフラで、目の焦点も合っていない。

男の出血量が凄く、今にも倒れそう。

それに、心がついて行けなくて、自分じゃ無理だと思って逃げ出してしまった。

「あ、ああああの！ああああそこにいる人が重傷なんです！きゅ、救急車呼んで下さい！」

ガクガク震えながらも、近くにいた人に声をかける。

携帯とかは持っていなかったのも、人に頼むしかなかった。小鳥遊は善人である。

なんかよく分からないけど、透明人間と戦っていた目の前の人、ケガを負って貧血で倒れたのを放っては置けなかったのである。

夢だと何度となく思ったけど、助けたいという気持ちが抑えられなかった。

その後、極度の緊張から、気絶してしまった。

そして、それがよどみで、自分に取りついていた魔物で、あのままだと殺されていたなんて思わなかった。

それを知るのは随分と後の事になる。

〇〇〇

あれから1ヶ月後、何の問題もない日々を過ごしていた。

あれは悪い夢だったんだと思った。

まあ、それにしてもリアルだったが。

休日に外出許可を取って、小鳥遊は友達と外を歩いていると聞こえてくる声がある。小鳥遊には聞こえてないが、毎回こんな会話がなされていた。

「...なんかさ、あの子、めちゃくちゃ可愛くない？」

「あのセーラー服着てる女子高校生？分かる！チョー可愛い！」

小鳥遊は歩いているだけで、老若男女問わず、皆が彼女を振り返った。

両親が国宝級イケメン、国宝級美人として有名な夜の蝶。その子供が小鳥遊である。

両親は40代の高齢出産で小鳥遊を生んでいた。

そして、国宝級なので、健康管理もバッチリで美意識も高く、必然的に小鳥遊にも影響しており、生まれながらに超健康的で、遺伝子もいいので、髪もサラサラの黒髪、肌艶もよく、茶色の目もバッチリしていて、日本人好みの可愛らしさも綺麗さも合わせ持つ整った顔立ちをしていた。

健康的ゆえに、自然と香る匂いも凄くいい匂いである。
女子高校生の匂いと言われている香りに満たされていた。

女優だったとしてもトップクラス、海外でも勝負できる顔立ちの美貌。それが一般人の中に混ざっていたら最早別次元だった。

話しかけようとするものは、最早いない。

見てるだけで良いです！あ！お金払いますね！という顔だった。

そして、夕方過ぎた夜の頃、路地裏で黒い影を見かけた。

え？何だろう？と思うも直ぐに消えてしまったので、友達に少し用事があるから先に行つて、と声をかけて、何となくそこに近付いていく。

しかし何もなく、気のせいだったかとその場を後にして、友人を追いかけようとした。

「くそ！またあの時の獄級かよ！俺はまだ回復魔法のヒールもまともに使いこなせないのに！」

と言って現れたのはあの時の緑髪の男だった。
ギョツとしてしまった。

また夢を見ているのか、と回れ右をしようとすると、強い口調で、お前、下がってろ！と言われたので、ビビり上がってしまった。

そして、彼は、そのまま見えない何かと戦ってるみたいなポーズを取り始めた。

見えないから、理解もできない。

彼にはどんな物が見えているの？

2章.魔法使いの彼

レオ目線

この世界では魔法使いがごくまれに生まれてくる。

しかし、まれすぎるために、裏で動くのが普通。

この世にはよどみと呼ばれる魔物がいて、人間の負の感情によって強く育ち、人々を襲う。

人のあらゆる感情、特にその人が今感じている強い気持ちを増幅させてそれをエネルギーとする。

それがよどみである。

それを退治するのが魔法使いである。

魔力がある者にしか見えないので、魔法使いじゃないとよどみは倒せない。

よどみは魔法使いには特に有害。

魔法は精神力による影響が大きい。

そのため、魔法使いたちは、よどみを見つけると即座に排除しようとするのが一般的。

強いよどみの場合は高単価の依頼すらある。

しかし、人の負の感情というのは何処にでも湧き出てくるので、終わらない。

魔法使い自身からもよどみを生み出すので、キリがない。

そして、退治してくる魔法使いをよどみは嫌っており、取りついた者には、魔法使い達を嫌いになるように仕向ける習性があった....。

そして、魔法使いには15歳を過ぎると覚醒というものがあるのだが、俺も高2の16歳で覚醒した。

覚醒するとあらゆる魔法が使いこなせるようになり、ジョブという職業みたいな物も選択もできる。

そして、覚醒して2、3日しか経っていないこの時のレオは、高難度の魔法なら使いこなせる様にはなったものの、最高難易度の魔法は使いこなせる様にはならなかった。

ヒールもまだちゃんとは使いこなせていなかった。

きゅうちに陥った時は、一時的に使えたけど、そう易々と今まで使いこなせなかった技を日常的にもひんぱんに使える様になるなんて事はないのである。

やはりそういうのは追い込まれた時ではないと出来ない。

だから、今は、最高難易度の技を上手く使いこなせないのも無理はないと自分に言い聞かせて技をみがく。

そして、この前よりは軽くあしらう事ができた。

彼女を殺そうとしていたのは獄級でも上位クラスの化け物である。

覚醒前のレオはそれを相手にできるギリギリレベルだったので、追い払うのもやっとだったが、今では傷を軽く回復させながらも倒すことができた。

...獄級って奴はしつこいよどみである。

しかし、楽しい！あの時よりも確実に強くなった！そういう実感があるので、気付いたらニヤニヤしていた。

そして、小鳥遊の方を向いた。腰が抜けているらしい彼女に、レオはビクッ！とされた。そして、それを見て、彼は、はあー、とため息を吐いた。

お前怖いんだよ。とよく言われるが、こういう事？

そして、和ませる為に敢えて言った一言が、人の神経を逆なでする逆効果な発言だった。

続きは製品版でお楽しみ下さい。

